

平成二十一年十一月一日発行 第十八巻第十一号 通巻第二〇九号 毎月一回一日発行  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐

かい

平成20年11月号

岡井省二創刊



白帝

高橋将夫

鶴 鴿 の 来 て か ろ や か に な る 流 れ  
禪 寺 の 添 水 か つ ん と 心 打 つ  
瓢 の 実 を 握 る 手 の 内 見 せ ぬ な り  
牛 蒡 掘 一 気 に 掘 つ て し ま ひ け り

藁塚に全体重を委ねをる  
いいところ似んねと言はれ涼新た  
倒すため並べるドミノ文化の日  
まだ酔うてをらぬとどびろくに酔ひし  
一切は即一にして一位の実  
神鏡と魔鏡に映る曼珠沙華  
白帝は持たぬ兵馬と牙城かな

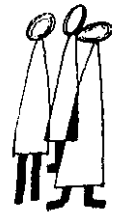
# 槐安集

水野恒彦

夏の三角年々重き父郷なり  
大澁団扇を省二ゆつくり使ふかな  
桐の木の蒼然として晩夏かな  
旅寝して枕のなかを雁のこゑ  
祭文のきこえて萩の夕日かな

延広禎一

種壺を抱へる翁水の秋  
熊蟬の羽根にうかびし宝相華  
酌の交はす古酒雲間の星座かな  
山晴れて白桃の眉目菩薩かな  
偈となれる色なき風や熊野なる



加藤みき

砂浜に万歳の影秋立ちぬ  
踏みつけて掻き出してをる栗二つ  
天空の澄みや気になることのある  
紙魚たちの行きつくところ御衣かな  
フイナーレや大空に満つ鱗雲

石脇みはる

奥山の遠をとこへしをみなへし  
赤梨をすする剥いて月の客  
夕顔をかかへ入りたる翁かな  
朝霧につつまれゐたる明日香かな  
仲秋や刀一本の竹細工

中島陽華

天高し若衆大地へ酒を撒く  
棗の実こぼれて室の八嶋かな  
子守唄夏の夜空の大三角  
夜涼みや腹をよじつて笑ひをり  
破れ芭蕉出来上りをる訪問着

竹内悦子

押しあうて花火の中にゐたりけり  
仙人掌の咲く日はいつも留守がちに  
リハビリのお釜は熱し吾亦紅  
化粧濃き女もゐたり孟蘭盆会  
空蟬や無礼な奴が踏んでゆく

栗栖恵通子

盆波の一番星となりにつけり  
かなかなや産山遠くなりける  
末伏の闇より橋の伸びてをる  
原爆忌赤きペンキのなぐり書き  
海底に礫のとどく敗戦日

大島翠木

月見草情死つぶさに見てゐたか  
須弥壇の外で廻りぬ扇風機  
きちこうやすくひてくもる銀の匙  
入りたる残暑の藪に誰もみず  
秋彼岸酒饅頭の匂ひかな

雨村敏子

鬼になりたるはかたし書を曝す  
蛇衣を脱ぐやこの世のはじまりぬ  
葎切や砂洲のむかうは見えずなり  
おめもじは叶はざりけり星祭る  
夜の秋せいげつ星月の数珠桐箱に

小形さとる

とんす東司にてかそけき雷を数へをる  
水汲んで山の明るき夏籠  
薄墨の放屍を一つ生身魂  
さびしいと二度ほど言へりきぬかつぎ  
がちやがちやよ日暮となりしがちやがちやよ

本多俊子

立秋や土曜の朝のダーズリン  
炎天や葉の鈍色にびいろを愛づるなり  
見えぬもの音でたしかむ夜半の秋  
絶望の一つは希望藍の花  
落葉松の金の針降る秋日中

久津見風牛

ふらふらと夏を越しけり金魚かな  
迷想も盡きたりぶだうの種を吐く  
水底をぞろぞろ歩く月夜茸  
浮雲や茗荷汁など飲めません  
水番の声を囁らしてゐたりけり

近藤きくえ

峰雲の大きくゆらぎ鯉の口  
笑顔もていつもおほきに生身魂  
迫りくる絶壁溪谷夏つばめ  
磐座も神木もろとも雲海に  
流れ星満濃池にいだかれて

近藤喜子

文机に考へ深く夜の鹿  
水翳る一瞬ありぬ秋の聲  
水澄むや生きとし生けるものに魂  
鳴き方に哲学ありぬ法師蟬  
高空へ声の極みを夜の鹿

谷村幸子

竹千幹くぐりし風や嵯峨の秋  
萩の坂のぼれば親し文殊さま  
磐船の巨岩しめりて処暑に入る  
離宮水一氣に飲みし竹の春  
八朔の石だたみゆく舞妓かな



# 槐市集

貴志尚子

日をはじく音のなかりし芭蕉かな  
海真白霧の中なる峠かな  
あぶくだつ硯の海や星月夜  
雨雲のはなれてゆけり盆の月  
青瓢夕べの雨のはげしくて

久保東海司

鴉瓜一つにがんじがらめの木  
秘湯とや泊りは冷ゆる山の霧  
聰明の相は猫にも涼あらた  
あひ逢はぬこともさだめや蟻の道  
口笛を久しく吹かずパリ祭

近藤公子

日輪と大観覧車とひまわりと  
鬼の子のゆらゆら時を刻みをる  
花わさび噛めば信濃の匂ひたる  
銀河ゆれ風に誘はれシャルウイダンス  
鱒雲戦いませんと団子虫

近藤紀子

氷片をロックアイスといへど朱夏  
三伏や鴉のだみ聲聞いてをる  
涼しさの特等席にいつも犬  
底紅の底を覗いてをりにけり  
丹田に手を当ててをり盆の風





# 槐集

## 高橋将夫選

理趣経や身の内にある夏怒濤  
聖観音の蓮華の風に涼みけり  
大の字に余白ほどよき簾  
南天にへび座ありけり熱帯夜  
六道参りむかうより影列なして  
わが丈を越してへちまの遊び蔓  
龍宮に忘れしものに箱眼鏡  
仔細ありげに大蟻の引き返す  
冷奴四角四面に生きてよし  
しやぼん玉誘ひの風にさからはず  
八月や青空を裂く音のあり  
草木のまだ水ほしき秋の虹  
白桃の重さ童の笑顔かな  
秋茜満濃池の水面かな  
醉芙蓉酔ひたる星のありにける

枚方 富松 寛子

大阪 久保東海司

摂津 中田禎子

折からの芭蕉打つ雨タンホイザー  
横たはるメドウサの首十月の  
干涸びし大地も秋の呼吸かな  
生と死のあはひで光る月夜茸  
瓢箪の棚の中なる小宇宙  
雨粒へ剣ヶ峯なる積乱雲  
はたた神しのつく雨にみそがれし  
風鈴の青くひびける空なりき  
すりおろすもののいくつも墨を磨る  
涼しさの眉の根ひそめ阿修羅像  
二番草三番草を刈りにけり  
薄皮を脱ぐや紅顔蒲の穂ぞ  
林縁に夏うぐひすの来てゐたり  
木天蓼を嫌ふ猫などゐるものか  
夕立雲不快指数の夜を狩る

岡崎 岩月優美子

枚方 中野 京子

奈良 瀬川 公馨

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

大の字に余白ほどよき罫 富松 寛子  
罫に横たわっているのはスレンダーな方なのだろう。ゆつたりと横たわっているさまが目につかぶ。罫に余白ができるという着眼がユニーク。

わが丈を越してへちまの遊び蔓 久保東海司  
「丈を越す」という句は珍しくないが、「糸瓜の遊び蔓」がいかに自由闊達、俳句でも楽しんでるのであるのか、「遊び蔓」がうらやましい。

酔芙蓉酔ひたる星のありにける 中田 禎子  
酔っていないが酔芙蓉。酔っていないが、酔ったように瞬く星があるらしい。

干涸びし大地も秋の呼吸かな 岩月優美子  
猛暑が過ぎて人も大地もホッと一息。大地に元気が蘇ってくるさまがリアルに伝わってくる。

涼しさの眉の根ひそめ阿修羅像 中野 京子  
阿修羅というと恐いようだが、奈良興福寺の阿修羅像は少し眉をひそめた優しいお顔だ。確かに涼しげでもある。

薄皮を脱ぐや紅顔蒲の穂ぞ 瀬川 公馨  
薄皮を脱いだ蒲の穂に紅顔を見る感性は鋭い。「朝に紅顔、夕べに白骨」を連想してしまった。

原爆忌疼きはじむる幻影肢 西村 純太  
事故で無くした腕が、まるで在るかの様に痛む場合がある。脳に腕の記憶が残っているからだろう。この記憶は消えた方がいい。だが、人類は原爆の記憶を忘れてはならない。

ばあもいま夏休みやし来んといて 竹中 一花  
夏休みで孫が帰ってくる。楽しみである。しかし、元気に圧倒されて大変でもある。なにしろ、自分の体でさえもてあます暑さだから。

秋簾移ろふ影と光かな 谷岡 尚美  
簾が作る影と光の綾。秋風に少しゆれて、まるで時が移ろいゆくようだ。

蜘蛛の網 廓の網や天の網 柳川 晋  
「廓の網」は遊女が廓に身を拘束される譬え。蜘蛛の網、廓の網、天網、鳥網、金網、投網、霞網、地獄網：まこと世の中の網だらけ。

夜の秋羽音の行方追うてをる 近藤 紀子  
月のきれいな夜であろう。いかにも風流である。何か虫の羽音が耳元をよぎった。秋の蚊かもしれない。気になって月見どころではない。そんなユーモラスな景を想像してしまった。